

## 印象 26 編 — 12 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

・ 総評に 20 篇を越える編数を残したのは、初めてである。投稿数の増加と共に、作品のレベルも上がってきている。その中で、敢えて最も印象深い 1 編を挙げれば、山口航平氏の作品である。母子手帳を「詩集」という感性に敬服した。

● 藤 色 ● ( 京 都 府 )

眠れないのなら  
おにぎりを握ろう  
溶けてゆく塩のおと

\* 「眠れないから」ならば、「握ろう」という動機付けの条件だが、「のなら」は仮定の条件付けだろう。「ないなら」ではなく、「ないのなら」の「の」の婉曲感と相俟って、「握ろう」との文脈に微妙なずれを生んでいるようだ。そこが読者の眼を止まらせる。これは自身への言葉ではなく、他者への呼びかけの言葉なのかもしれない。おにぎりを握ることは、手で手を感じ手を温めることになる。聞こえないはずの「溶けてゆく塩のおと」を聞く耳も繊細だ。

● 春 町 美 月 ● ( 大 阪 府 )

蜂蜜で暗く濁る紅茶  
甘くしたかっただけなのに

\* 甘くしたいための蜂蜜が、紅茶を混濁させる。飲みたかった透明感のある紅茶は失われる。このように、小さな想定外の連続の中で、私たちは生きているのかもしれない。

● 加藤美紀 ● (愛知県)

柚子シロップ  
氷砂糖が溶けていく  
わたしの故郷は  
雪が降っている

\* 柚子シロップを作って飲もうとしている場面と、雪の降る故郷という二つの場面が同時のこととして描かれている。故郷は、柚子シロップに氷砂糖が溶けているさまをみている「わたし」に現在進行形のさまとして思われているのかもしれないが、もっと高次の視線が鳥瞰しているものかもしれない。しかし、この離れた事象が合わさって描く一つの世界の静謐は美しい。

● 加藤美紀 ● (愛知県)

電気ケトル  
コトトカタタタする音が  
冷えた寝室の

耳 温 め る

\* 寢室には電気ケトルの音だけがしている。それが耳も心も温めるのである。それは一方で、電気ケトルの音が静寂を一層深めているからでもある。

● 永 恋 ● ( 東 京 都 )

外 の 空 気 を こ た つ に 持 ち 込 ん で  
み か ん か ら の お か え り  
靴 下 の た だ い ま

\* 冬の寒い帰宅を、童話の世界のように描く。こたつの上の「みかん」、こたつの中に投げ出される「靴下」の足。それだけのことなのだけれども、心は弾んでいるのがわかる。

● 桜 望 子 ● ( 千 葉 県 )

可 哀 想 な 子 な ん で す  
母 を 亡 く し て か ら 、  
ず っ と  
霜 に 枯 れ て ゆ く 菊

\* 三行目、四行目への展開が美しい。「母を亡くして」「可哀想な子」の以後を象徴するのであろうが、その後をずらして描いているようにも読める。それは下手に書かれるその後よりも深いところへ読者を連れてゆく。

● 桜望子 ● (千葉県)

非正規の非は羽のよう  
コピー機が吐き出す  
書類の束が羽音で

\* 「非」の字形が羽に似ているという発見は、コピー機の音が羽音に似ているという発見も誘発する。弱い非正規職員の立ち位置を炙り出している。

● 春町美月 ● (大阪府)

山羊の眼と珈琲豆は  
やけに陽気で哀しいし  
空なんか  
馬鹿みたいに高いだけ

\* 「山羊の眼」「珈琲豆」「空」を組み合わせる提示が作者の資質の高さを示す。「もの哀しい」「もの淋しい」の「もの」は、はっきりとした具体的な対象がないことを示すが、この詩のテーマは、この「もの」の感覚であろう。

● 春町美月 ● (大阪府)

灰色の叔父さんが  
いつも猫背なのは  
ふくらみ過ぎた  
ポケットのせいと思っていた

\* 「灰色」の「猫背」の叔父さんは、風采の上がない人だったのだろう。いつもポケットを膨らませているのも、お洒落とは遠い姿である。幼心にそれが一つになって定着する。幼いゆえのその理路は間違っていながら、深い人間理解に届いていそうでもある。

● 細村星一郎 ● (東京都)

あいまいな言葉ばかり  
おでん煮る

\* 「ばかり」という強い言葉に、怒りも批判も見えてきそうである。おでんを煮る一人の時間に、蘇ってきたものだろう。

● 風船 ● (東京都)

転校の  
前も  
後にも  
何故かいた  
水槽に棲むウーパールーパー

\* 転校によって若い人間関係が断たれる辛さ。そこに寄り添ってくれたのが、ウーパールーパーだったのだろう。どこか愛嬌があってまたどこか哀しげな風貌である。

● 風船 ● (東京都)

好きな絵柄の切手を買に行く

\* 実用の「切手」に、それを越える意匠を付加する。やがてそこに目的が生まれて、別の価値を生む。「好きな絵柄」を動機として購入する「作者」まではいかないが、私も、立ち寄った郵便局に美しい切手があれば、買い続けている。少年時代に切手収集が流行り、夜明けの中で田舎の郵便局に並んで二枚の切手を買った経験がある。その経験が、発売日でなくても買える現在を少し幸せにしている。

● 長谷川柊香 ● (宮城県)

春光に瞳孔閉じてゆく痛み

\* 「痛み」が、春光の目映い光を感じさせる。明るいだけではない青春性をも感じさせる。

● 呉田稔 ● (福岡県)

グラニュー糖の重みをかはる夜

\* お菓子作りの一過程かもしれない。しかし、ここだけ言葉で切り取ると、不思議な行為にも見えてくる。「重さ」でなく「重み」というだけで、非日常の入り口が見えてくるようだ。

● 春町美月 ● (大阪府)

びょうびょうと  
風が窓を叩きます  
自転車をこぐ君の耳は  
赤く痛いでしょうね

\* 室内で聞く風の音の「びょうびょう」が、窓外を別世界にしている。その別世界で自転車をこぐ「君」は、耳が真っ赤になるまで、風に煽られているに違いないのだ。

● 郡司和斗 ● (茨城県)

卒業をした瞬間に  
おじいちゃんになりたい  
落葉しゃらしゃらと踏む

\* 早くおじいちゃんになりたいかっただという詩人を知っているが、作者はもっと性急である。厭世観といえそうだろう。しかし、こんな問題解決の方法は存在しないので、「落葉しゃらしゃらと踏む」ばかりである。その音を自分に聞かせて、遠いところで折り合いを見つけるのだ。

● 郡司和斗 ● (茨城県)

猫に間合いをはかられているとき  
ずっと視界の隅にある月の暈

\*もちろん馴染みの猫ではない。行きずりの「私」を警戒する野良猫だろうか。月に暈がかかった夜の邂逅が、猫を特別な忘れがたい存在にしているのだ。

●ベロニカ●（神奈川県）

並木道

落葉の乾く甘い香は

亡き祖母の居た部屋に似ていて

\*藤原新也の『メメント・モリ』で、落葉（枯葉）と老人の類似性に言及したものを讀んだ記憶がある。落葉の匂いと祖母の（部屋の）の匂いが近しいのも同じ感覚だろう。ただ「甘い香」の慕わしさが、ここでのメインテーマなのだろう。

●雨傘うみ●（愛知県）

しんしんと夜に耳だけ熱くなる

\*文脈から「しんしんと」は「熱くなる」にかかるといえるだろう。静かなさまを思わせる「しんしんと」は直後の「夜」（が更ける）と思わせ、それを巻きこみながら「熱くなる」へ導かれる。そして「しんしんと熱くなる」の感覚の不思議さに、しばし佇むことになる。

●燦嗣いとり●（愛知県）

じいさんはリモートワーク  
ばあさんは Uber Eats の  
配達に行く

\* 桃太郎の語り口を借りて、現在のコロナ禍の社会を風刺する。柴刈りや洗濯という日常から切り離された「おじいさん」「おばあさん」の姿は、私たちの姿でもある。おじいさん、おばあさんゆえに、より一層追い詰められた像を結ぶだろう。

● 桜咲 ● (千葉県)  
教科書の偉人たちは  
みな  
サングラスをかけた  
ちよい悪になっている

\* 誰もした経験がある教科書への落書き。偉人達に躊躇なく落書きをできるような経験の浅い幼さも、後になれば貴重なものに違いない。

● 呉田稔 ● (福岡県)  
夜が冷たくなったので  
ハリネズミを飼いたい

\* 「作者」にとっては自然な感覚なのかもしれない「ハリネズミを飼いたい」理由が「夜が冷たくなったので」は、読者

には距離感を伴う感覚だ。しかし、それが不思議に心地良い。

● 儀間 ゆみ ● ( 沖縄県 )

ゆっくりと歩いて  
選んだ貝殻を  
花壇に置く母  
眺めてる父

\* 「母」は、海岸で貝殻を拾い集めて、花壇を飾っているということなのだろうか。父はそれに手を貸すわけでも、止めるわけでもなく眺めている。描くのは静謐な夫婦の関係か。

● 山口 航平 ● ( 佐賀県 )

母が見せてくれた  
僕の母子手帳は  
まるで詩集のようだった

\* 「詩集」の比喻が美しい。出産、育児の記録は、まさしく母の詩集だろう。一読以後、母は詩人にならなければ、現実的に厳しい、この大変な時期を乗り越えることも難しいのではないかと思えてくる。

● 門野 あおい ● ( 東京都 )

「なにかあったら」  
暮れに母からもらう真珠

\* 「なにかあったら」は、もちろん死を意識しての言葉だろう。母は自分で使い続けた真珠のネックレスを娘に譲ったのである。真珠は冠婚葬祭のために使われる宝石でもある。歳末はさまざまのことを思わせ、またさまざまな決意を促す時期である。

● 真島 ● (京都府)

ポインセチアを抱えて帰る

\* ポインセチアはクリスマスの花卉である。クリスマス前ならば、その準備のひとつとしてのものだが、後ならば売れ残った特売のものかもしれない。前者ならば、あたたかい家庭が浮かび、後者ならば、一人の生活が浮かぶ。